

BOOKS: ライフ・アフター・パンク・ロック (ケラ著) の本の
166, 167 ページ
ケラの遺言 (小堀三著)



「ケラ様」が『ライフ』に登場するのは、この本で初めてである。ケラ様は、パンク・ロックの歴史的な存在であり、その生き生きとした姿が、読者の心を捉えている。ケラ様の人生は、音楽を通じて多くの人々に感動を与えてきた。この本を通じて、ケラ様の人間性をより深く理解できることを期待している。

167



ケラ様、「ライフ」(P.166)にある歌舞伎町のアートヴィレッジ。私のマルクス初体験があとこでした。脳ミンガぶとびました。以来狂信的マルキスト。ウッディ・アレンの「ハンと彼の姉妹」とマルクスのことがP.169に書いてありますが、私もあの映画でマルクス兄弟が踊っている場面になったときは、映画館の中で「アーン! あんまりうれしくて拍手までしてました。」遺言」P.27, 小学生のケラ様か「明治通り沿いの天井棧敷」のビルを通過して遊び場に行っていた、というところも読んで、すっかり忘れていたあの愛てな建物を思い出しました。私の家もあの近くだったので、そう、マネキンの手足がニョキニョキでいる気味の悪い建物でした。ね。アートヴィレッジといい、天井棧敷といい、ケラ様の行動範囲と重なるところがあったのだと思うと胸がドキドキします。ケラ様は享年令より10年はスندنているお方で(だから遺言では1999年12月21日に獄死するまでの自分の生涯とそのあと2000年6月におこることまで10年先どりして本が書けるのですね)、私は享年令より10年はオクレているおかげで、この2冊の中には「そう、そう」と思えるところがいっぱいあります。『クラウド』と書いてあるのには感服! 『アーン』は『ブルー』と

LIVE: 風太郎とその一味 1990. 3. 16 新宿アンティロック
ボイラーズのヴォーカルの人が、ギター、ウクレレ、ハーモニカをいれてやったライブ。あの場所、あの時に存在していたものを、ことばにするにはできない。ことばにできるものと思ったら、ことばにせざるにはいられない。ことば、あの場所、あの時に存在していたものを、いままで思いうかべている私の心の中のこと。最後にやった「イサミさんという男を知ってるかい。イクラが生まれた漁村の欠食のおと、さんさ...」ではじまる「イサミさんという歌をきいていて、すうと昔、家の近くのガード下にいた浪浪者のことを思い出した。いつも一人で、新聞紙をひろげて、その土になにかを描いていた。こわい人じゃなかった。私は「あの人の方がよっぽど人間らしいと思う」と日記に書いた。だけど、そう思うのは、他人に話したことはなかった。心の底に沈めていた。こういうふうにはじめに沈めたことが、たくさんあった。歌にして歌わないまでも、自分の心を何かにして外に出したことがなかった。感じたことをかくしたまんま生きてきたから、ひどい思いもせず人並みのことができて、だから人並みのくらしのなかにいるのだらう。不正直。風太郎とその一味のライブをきいて、心のなかに大きなものをかえて家に帰り、ドアをあければ、そこには人並みのくらしが腰をすえている。ウォークマンでテープをきいているときのように、私の頭の中には歌がなっている。歌の世界に駆けていきたくな。でもくらしのなかにいる。それでいい。 (5/2アンティロック)

(恋) 怪子のオズメライゾ: 5/4 ティラザウルス ラマ、5/6 10インクUP LAZY WAYS, 5/27 ボイラーズ 200000x8 HELLO 庵不良裏, 5/9 LIP CREAM アンティロック, 4/30 WAIATS ACB, 5/10 RIP YAW WINK ロフト

LIVE: LOOKING FOR THE BRAND NEW BEAT 1990. 3. 29 渋谷公会堂

SKAFUNK, COR-SEZ, UBxTAPS, THE BOLD, P11: Z. むくむくずえび、ティラザウルスの8バンドで5時間半くらゐ。ありふれた演奏、ありふれたステージのバンドばかり。いちばん人気のあるらしいえびなどは、内容以前に演奏がちゃんとしていないのでお話にならない。P11: Zも人気があるようだ。が、なんともない。私の目当てのティラザウルスも、もうおかしなところまでつきぬけないまま。この日の収穫はなんといつも、むくむくずえび。特徴があってダントツにおもしろい。演奏のあいまに、ヴォーカル兼ギターの人が休みなく早口でしゃべるんだけど、それが実に楽しく、ライブであんなに声もたてて笑ったのはTHE ビーズ以来のこと。演奏もきまってる。

(追記) むくむくずえび
3月29日 渋谷公会堂のライブが楽しかったので、4月10日エッグマンのライブに行った。1時間あまり、曲のタイトルの紹介をする大塚サチオ(ヴォーカル兼ギター)のおしゃべりに挖腹絶倒。むくむくずえびのあとにやったTHE HIPS目当てに来たら、いい人たまたまで大笑いしていた。大笑いしていると演奏がはじまる。笑いがいまよりとまっちゃって演奏にひまごまれちゃう、真顔になってステージを見つめちゃっ。す。い。ね。
◎この日やった曲のタイトル: ①「だから なんだ」②「UNLUCKY BOY」③「SET ME FREE TONIGHT」④「スタッフ くらまき」⑤「かけ ぽ」⑥「3時のあやつミラクル スキー」⑦「人生の裏街道」⑧「ホテル パラダイス」⑨「ギョラゼロ ギャラ」⑩「ぶらぶら」⑪「石原 しまみ君に うまれかわりたい」
◎挖腹絶倒のおしゃべりの中に出てくる固有名詞のなかからいくつかひろい出すと... 小笠原、ホワイテスニック、ステーブ・ヴァイ、益田 善七郎、罪と罰、天国への階段、アリアム、SHINSHINE OF YOUR LOVE、エリック・アラブトン、ジョン スカイウォークス、ハウンドドッグデブの 鬼太郎、ワニブックス、ツルゲーネフ、クリスタルキング、野村義男、鶴田浩二 etc... これらの固有名詞が曲のタイトルと どうゆふううに結びつくのか? それをライブに行った人にしかわからないよねえ。⑤と⑦の曲が むくむくずえびのライブ 5/4 横濱ビブル, 5/7 吉祥寺 Be-Point 5/10 渋谷 Egg-man (7マン陣に?!)

MOVIE: JANIS
新宿武蔵野館
月~金 9:10PM~
5/25 まで上映



孤独を失った人間、孤独を感じた人間にとってこの世は苦しく空しいところだ。ジャニス・ジョプリンもそんなふうな歌を歌うくらいこの世の孤独を感じていた。孤独を失った人間、孤独を感じた人間は若くても老成する。ジャニス・ジョプリンもステージを降りたところでは若々しかったかもしれない。けれど、歌を歌っているジャニス・ジョプリンは、人生を失ってしまった。孤独の井戸の底に。自身も生きて老成のようだ。歌うたびに深く人生を生きたからだろう。だけど歌うことで孤独を解き放ち、自由を獲得していたにちがいない。ジャニス・ジョプリンがじじから求めたものは気高いものだったろう。この世では得られないことはわかっていても、求めずには生きていけない。ほどのものだったろう。じじから生きること欲した。その分だけ孤独も深い。孤独を生きた。ぬくことか。生きることだ。孤独をまぎらわせた。ごまかしたりせず。生きぬくことだ。ジャニス・ジョプリンが闘ったように。

LIVE: ボイラーズ 1990. 3. 30 高円寺 20000V

ボイラーズが終わったら、壁を背に床にへたりこんでしまった。むぎに顔をつめて。強烈だった。肉体的な痛みなんかなんにもないのに、心の中で「痛い、痛い」と叫んでいた。存在の痛み。この日のボイラーズ、死ぬことには音楽のラチを越えているものだった。「生きる」ということを抽象的にならなく具体的に見せられた。私も力の限り生きていなければならなかった。思考も論理も全く入りこまず、生かすか? ぼうぼう燃えていた。解放されたというでもない、自由を感じたというでもない、自分が許されたと感じたというでもない。あれ、音楽なんかじゃない。生命が燃えていた。

記事以外のライブ: 4/10 LIP CREAM アンティロック、この日のメインバンドで、イギリスから来た EXTREME NOISE TERROR ぶりクラッシュ、